山脇学園中学校
2025年度 入学試験問題
帰国生入試 Ⅰ期

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は30分間です。
3. 問題は一～三までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。解答らんの外に書かれたものは採点の対象としません。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
6. 字数指定のある問いは、句読点・記号も一字として数えます。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

田んぼにおける「害虫」は、被害をもたらす虫ではなく、「作物の稲を食べたり病気をうつしたりする虫」のことです。稲を少ししか食べない、また少ししかいないなら、稲も苦笑いする程度でしょう。しかしそうしたものも残念ながら「害虫」という分類に含められているのです。この分類法では畦の雑草を食べる虫は「害虫」ではありませんし、人間を刺したりする虫も、稲を食べないなら「害虫」ではありません。この本でもその考え方を[注1]踏襲します。

また害虫とセットで語られる「益虫」も「益」になるという意味ではなく、「害虫を餌にしている虫」という定義で使います(ここで言う虫にはクモも含めます)。アシナガバチ(脚長蜂)は、人も刺したりするので「A」に入れたい人もいるかもしれませんが、稲の害虫であるガ(蛾)の幼虫を食べるので「B」です。イナゴは食用にもなりますから「C」に入れてもよさそうですが、稲も食べるので「D」です(「益虫」ではなく「天敵」という用語も、学会ではよく使われています)。

害虫 177 種	益虫 約 300 種	ただの虫 約 1400 種

図 1-1　田んぼの虫たちの分類で見えてきた田んぼの全体

江戸時代には、こうした区分けはしていませんでしたが、明治時代の中頃から「害虫」「益虫」という分類や呼称が使用されるようになりました。しかし「害虫」「益虫」という呼び名や分類が定着した後も、そのくくりに入らない虫たちの名前は一九八四年になって、私たちが「ただの虫」という新しい言葉を造語するまでは、ずーっとなかったのです。

図1-1からわかるように、田んぼには害虫でもなく益虫でもない虫もいっぱいいます。[注2]虫見板で観察していると、これらの虫を「害虫」だと勘違いする百姓も少なくありません。その代表がトビムシ(跳虫)です。ぴょんぴょん飛び跳ねる虫だからこの名前がついています。秋になると稲一株に一〇〇～五〇〇匹もいるのが普通です。稲本体ではなく、稲の根元にくっついている枯れた葉を食べる虫です。I「害虫」でも「益虫」でもありません。そのため害虫と勘違いされないように、トビムシをはじめとする虫たちに名前(総称)をつける必要が生まれました。そして私と農学者の日鷹一雅が「ただの虫」として公式に提案したところ、次第に受け入れられていきました(宇根豊・日鷹一雅・赤松富仁『減農薬のための田の虫図鑑』農山漁村文化協会、一九八九年)。

「あまりにも日本的で、英語に翻訳しにくい」と学者や研究者の中から「ただの虫」という命名に異議が出たこともありましたが、現在では、学会でも「ただの虫」という名称はよく使われています。英訳は「neutral insect」(中立的な虫)となっています。いまでも、①私はこの命名はとてもよかったと思っています。「害」とか「益」という価値判断で虫を分けるのではない、新しい世界を切り開いているからです。

「②もし「ただの虫」がいなかったら田んぼはどうなると思いますか」と小学五年生にこの質問をしたら、びっくりするような答えが返ってきたことがありました。(※)

「ただの虫がいなくなったら、田んぼは自然ではなくなるよ」と言うのです。私は「なるほどな」とうなりました。私は「生物多様性がなくなる」ぐらいの答えしか用意していませんでした。益虫のクモは、害虫だけ食べていたのでは生きていくことができません。トビムシなどのただの虫も食べないと栄養のバランスが崩れて育たないのです。またトビムシがいなくなると食べている枯れた葉・藁が分解しにくくなり、いずれ田んぼの土にも影響が出てくるでしょう。この小学生は「害虫・益虫・ただの虫」と分

ける前の、まるで江戸時代のような「内からのまなざし」で田んぼの世界全体を見ていたのです。すごい、と感心したのは言うまでもありません。

「ただの虫がいなくなったら、田んぼは自然ではなくなる」ということについて、くわしく見ていきましょう。

「害虫が大発生しないような栽培方法を工夫する」ためには、どれが害虫でどれが益虫(天敵)かを区別できなければならないでしょう。 Ⅱ 、虫たちの世界を「害虫・益虫(天敵)」という基準だけで分けてしまうと、有害なものか、有用なものしか存在しないと人は考えてしまいがちです。明治時代以降に「害虫はすべて駆除してしまえ」という発想が強くなっていったのは、この分類法にとらわれすぎたためでしょう。実際には、虫たちの世界を「何を餌として食べているか」と、外側から X な分類基準に従って分類しただけだったはずです。

害虫も少なければ、害どころか益虫の餌になって田んぼの自然を豊かにしています。また害虫も益虫も、ただ好きな餌を探して食べて生きているだけだというとらえ方もできます。そもそも害虫・益虫自身に「害虫・益虫」という自覚はないでしょう。それを人間の都合で分類してしまったために、農薬に頼り切った農業技術が盛んになってしまったのです。

私は命名者の一人ですから、正直に言いますが、当初は「ただの虫」を「害虫でもなく、益虫でもない虫」と定義していました。しかし、それでは「害虫」や「益虫」が主役で、「ただの虫」はあまりにも[注3]マイナーな定義なので、「作物や害虫以外の生きものを食べている虫」というように変更しました。科学的にはこれでいいと思います。「なぜ、ただの虫が一番多いのか」という疑問に、「ただの虫の餌が一番多いからだ」と答えることができるからです。

しかし「ただの虫」のほんとうの価値は「害虫でも益虫でもない世界」に人の目を向けさせたことですから、「害虫でも益虫でもない虫」という説明も悪くなかった、と思っています。そして、この定義は昆虫やクモだけでなく、動物全般にも当てはめることができます。

百姓に「ただの虫」の代表であるゲンゴロウやタガメ（田亀）やミツバチ（蜜蜂）の名前をいつ誰から教わったのか質問すると、誰に教わったかは覚えていないけど、③子どもの頃に覚えたのは間違いない、と答えます。子どもは「害虫・益虫・ただの虫」を区別するでしょうか。しないでしょう。子どもたちは、ただ生きものと向き合って、よく見かけるもの、捕まえやすいもの、好きになったもの、怖いものから名前を覚えていきます。多くは、家族、近所の人、先輩、友だちから教えてもらったものです。

私たちが一番知っている虫の名前は「害虫」でもなく「益虫」でもなく「ただの虫」です。なぜなら、図1-1ですぐにわかるように、「ただの虫」が一番多いからです。それだけではありません。「害虫」や「益虫」は、一～三㎜ほどの小さな虫が多いのに比べて、「ただの虫」はゲンゴロウやタガメやタイコウチ(太鼓打)のように目に見えやすい大きい虫が多いからです。そして子どもの頃からの遊びの相手としてそばにいたからです。

私たちはまだ科学的な外からのまなざしを知らないうちから、自分自身の内からのまなざしと感覚で、生きものたちの名前を次々に呼んできました。分類の基準は「好きだ・嫌いだ・どちらでもない」「捕まえたい・触りたくない・どうでもいい」あるいは「かっこいい・変な感じ・どちらでもない」といった分け方でした。これは客観的でなく、その人にしか通用しない方法ですが、自分なりの分類の仕方だったのです。

こうして私たちは自前の尺度や方法で、生きものたちの世界全体をつかんで育ってきたのです(難しい言葉を使うとこれは「世界認識」そのものです)。しかもその多くが「ただの虫」「ただの生きもの」の[注4]範疇にいるも

のでした。私たちは、決して「有害・有用」という区分けで、生きものたちとのつきあいを始めたのではなかったのです。これはとても大切なことなのに、忘れてしまっています。

「自然」という言葉を辞書で引くといろいろ説明が載(の)っていますが、ざっくりと区分けすると英語の「nature」に通じる自然界・自然環(かん)境の意味と、ひとりでに、おのずからという「自然にそうなる」の意味で使用されることが多いと思います。「ここは自然が豊かだ」という自然環境の意味で使う名詞の「自然」は、明治時代に英語の nature の翻訳語として、新しくつくられた言葉です。それまでの日本語の「自然」には「自然にそうなる」という意味しかなかったのです。

「えっ、こんなに自然が豊かな国なのに、自然(環境)という言葉がなかったなんて、信じられない」と思いませんか。

日本には前者の「自然」に近い言葉に「天地」があります。この「天地」には、人間も神さまも含まれています。ですから「人間も自然の一員だと思いますか？」と質問されたら、多くの日本人が「そうです」と答えるでしょう。私たちは「自然」を天地の意味で使っているのです。

他方、西洋のキリスト教的な自然観では、「神さまが人間のために自然をつくった」と考えられてきましたから、「自然」の中に人間は入らず、あくまで「利用する立場」として存在しています。日本人のとらえ方とは違っているのがわかります。

「天地」のとらえ方で自然を見ている時は、人間が自然の一員になっているので、「自然」そのものは見えません。見えるのは赤トンボや田んぼや山や雲です。ところが「自然っていいな」「自然は守らなくてはならない」という意味で「自然」を見る時には、自分を自然の外側に出して、自然全体を思い浮(う)かべていませんか？ そうしないと「自然」という概(がい)念は使えません。つまり現代の日本人は、④日本古来の自然観と西洋由来の自然観の両方を身につけていると言ってもいいでしょう。⑤だから「自然の生きものは、自然に生きている」と言われても、すぐに意味がわかるのです。

（一部表記を改めました）

【宇根豊『農はいのちをつなぐ』】

注1　踏襲…前のやり方をそのまま受けつぐこと。
注2　虫見板…田んぼの虫を観察するための板状の農具。
注3　マイナー…あまり知られていないこと。
注4　範疇…ある特定の領域や範囲のこと。

問一　Ⅰ・Ⅱ に当てはまる言葉を、次のア～オからそれぞれ選びなさい。（同じ記号を二度使用しないこと）

ア　なお　　イ　まず　　ウ　なぜなら
エ　しかし　　オ　つまり

問二　A ～ D に当てはまる言葉を、次のア・イからそれぞれ選びなさい。（同じ記号を何度使用してもよい）

ア　害虫
イ　益虫

問三　――線①「私はこの命名はとてもよかったと思っています」とありますが、その理由を「～から。」に続くように（※）より後の本文中から二十四字でぬき出しなさい。

問四　――線②「もし『ただの虫』がいなかったら」とありますが、「ただの虫」がいなくなったらどのようになると筆者は説明していますか。当てはまるものを、次のア～エから選びなさい。

ア　人間にとって都合のよい生き物だけが田んぼに残り、農業を行うのによい環境が整う。

イ　「ただの虫」がいることで成立していた田んぼの生態系が崩れ、田んぼの土も育たなくなる。

ウ　「ただの虫」が食べていた害虫を駆除するため、農薬に頼り切った農業が盛んになる。

エ　「ただの虫」を餌にしている益虫が育たず、害虫が増えることで農業がつづけられなくなる。

問五　X　に当てはまる言葉を、次のア～エから選びなさい。

ア　総合的　　イ　主観的　　ウ　科学的　　エ　人工的

問六　――線③「子どもの頃に覚えた」とありますが、その理由として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア　田んぼの中で実際に見たときに、一番近くにいる「ただの虫」に親近感を抱きやすいから。

イ　「ただの虫」は人を傷つけないので捕まえやすく、子供たちが興味や関心を持ちやすいから。

ウ　子どものころは経験から得た直感によって、人間の役に立つ虫を判別して興味を持つから。

エ　子どもたちは自分の興味や関心にしたがって世界を見て、身の回りにいる虫を覚えているから。

問七　――線④「日本古来の自然観と西洋由来の自然観」とありますが、それぞれどのように自然をとらえていますか。「～とらえている。」に続くように五十字以内で説明しなさい。

問八　――線⑤「だから『自然の生きもの～意味がわかるのです』の説明として、最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア　明治時代に新しく作られた「自然」という言葉が、現在では受け入れられ定着したということ。

イ　現代の日本人は「自然」を英語の翻訳語の「自然」ではなく、「天地」の意味で用いているということ。

ウ　「自然」の意味は明治時代以降に変化し、現代の日本人は「自然環境」の意味で用いているということ。

エ　現代の日本人は「自然」という言葉を、複数の意味を含む言葉として認識しているということ。

問九　本文の内容として正しいものを、次のア～エから選びなさい。

ア　「害虫」も少なければ「害虫」と分類されないのに、駆除すべきだという考えが主流である。

イ　「害虫」や「益虫」という分類が明治以降に定着したあとも、その分類に入らない虫は存在した。

ウ　「ただの虫」は一九八四年に筆者らが命名するまでは名前がなく、農民にさえ知られていなかった。

エ　「ただの虫」の呼称は、後に「作物や害虫以外の生き物を食べている虫」と変更された。

二　次の1～10の――線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

1　地球オンダン化について考える。
2　ゲンカクな父の教え。
3　質問にはそのツド答える。
4　選挙のトウヒョウに行く。
5　作物をチョゾウする。
6　無病ソクサイを願う。
7　足りない部分をオギナう。
8　コーラスを指揮する。
9　無礼なふるまいをする。
10　快く提案を受ける。

三　次の1～5のことわざが完成するように（　）の中に当てはまる漢数字を答えなさい。また、ことわざの意味を、後のア～キから選びなさい。（同じ記号を使用しないこと）

1　（　）人寄れば文殊の知恵
2　天は（　）物を与えず
3　すずめ（　）まで踊りわすれず
4　（　）寸先は闇
5　悪事（　）里を走る

ア　幼いころに身につけた習慣は、年を取っても抜けきれないこと。
イ　その場をごまかしても、よくない行いはいずれ知られてしまうこと。
ウ　一人の人間はいくつも才能や長所を持っているわけではないこと。
エ　ほんのすこし未来のことも、まったく予知できないこと。
オ　これから先に起こることからは、だれも逃れられないこと。
カ　よくない行いや評判は、またたくまに世間にしれわたること。
キ　平凡なものも集まって相談すれば、よい考えが浮かぶこと。